



ケープタウン市全貌



社会人大学院のメンバー

# 永遠なれ至誠の学び舎の心

大中忠夫

(萩高22回・昭45卒)

二〇一二年夏に南アフリカ・ケープタウンの社会人経営大学院で八日間連続の「グローバルリーダーシップ」講義を客員担当しました。その講義の後半で至誠と貢献の概念を討議した折に、受講者からこれは「UBUNTU（ウブンツー）」という「他に対する思いやり」「他者との絆の信頼」を意味するズールー語源のアフリカ文化の概念と同じではないかと教えられました。

アフリカにそのような概念が存在したことにも驚きましたが、同時に、十八世紀から二十世紀までの近代史における西洋文明の野蛮さを思わず得ませんでした。科学的合理性を追求する近代科学と産業革命で国力を蓄積した欧米列強がその闘争能力で、儒教や仏教あるいは「ウブンツー」のような人間の尊厳と融和を大切にする社会文化地域を蹂躪し支配してきた歴史を目の当たりにした思いでした。

しかし二十一世紀初頭の現代では、その科学的合理性による富の追求、資本主義システムを前提とする先進社会の企業経営は軒並み自己消耗と消滅の一途をたどっています。

そしてその原因が資本主義システムの限界のない投資効率追求であることは現代の企業経営研究では自明となりつつあります。また、なぜ限界のない投資効率追求が企業を自己消耗させるのか。この原因も少し冷静に考えれば至極単純です。

すべての価値交換の対象物には「経年劣化」という逃れられない運命があります。米も魚も時間と共に腐り工業製品も劣化耗します。にもかかわらず、価値交換の証拠情報でしかない通貨にはそれらとは逆の「経年増殖」力を認めている経済システムがその原因なのです。

多くの宗教がその初期には禁止した「利子」と呼ばれる通貨（資本）の経年増殖力。その時々刻々の増殖率を上回る利益効率を人間が構成する企業に求め続ければ、人間が疲労困憊し企業も自己消耗のサイクルを歩み

始めます。資本という名の通貨は人間が寝ている間も遊んでいる間も絶えず増え続けるわけですから。これが現代欧米社会ですら認識し始めた資本主義システムの限界です。

このひどく単純明解な事実が経済学者を含めた多くの人々の目を逃れてきた一つには「資本論」などという実はほとんどの人がすべてを読んでもいなければ理解してもいいにもかかわらず何かわかつたふりをさせられている膨大な著書の影響もあるでしょう。

しかし、その通貨増殖の経済システム、すなわち資本主義、を無条件に受け入れれば、農作物や工業製品をつくる人々や魚をとる人々よりも資本を蓄積することを本業とする人々が強い力をもつことは当然です。

偏在が出現しています。二〇〇七年には米国社会では資産上位1%の人々が社会の富の三十三%を所有するまでになりましたが、その格差拡大がとどまる気配はありません。

さらに深刻なことには、この金融

経済システムの猛威によつて人間社会の平和持続の絶対条件である「雇用」機会がグローバル社会全体で縮小し続けています。人間社会が平和裏に未来永続するための絶対条件が消耗、消滅し続けているわけです。

この状況に直面していま欧州社会では新たな企業経営理念が出現しています。それが、アングロサクソン流の株主財産増殖の資本主義型経営を否定し、未来社会貢献を最優先で追求する「持続的成長」の経営理念です。そのリーダーが未来の食料と水資源の供給を自社の最高経営目標とするネスレとユニリーバの二社です。

この持続的成長経営には、資本主義経営との本質的な違いがもう一つあります。資本主義経営は科学的合理性に基づく緻密正確な損得勘定力である「管理能力」を必要とします。これに対しても持続的成長経営は人間個々人の尊厳と人間社会全体の融和共存の両方を追い求める心の声に耳を傾け、それに対しても何ができるかを考え実行する能力、すなわち人と社会に貢献するための「学習能力」を必要としています。

この違いは、「学ぶ力」を、自分が獲得するものを最大化するために使うための「学ぶ力」がまさに松陰先生が松下村塾において実践された能力にほかなりないことに気付くです。

松陰先生を心の師として育ち萩高で学んだ人々は、この「人と社会に尽くすための学ぶ力」がまさに松陰先生が松下村塾において実践された能力にほかなりないことに気付くです。

またそのことに気が付けば、そのような萩の文化と教育環境で育つた人間には至極当たり前の「社会にくす意識と行動」が現代グローバル社会ではむしろ急速に希薄化しつつある現実に驚かざるをえないでしょう。しかしその現実は、たとえば東日本大震災の現場の人々の地域社会に全くす行動があたりまえに存在する情景にグローバル社会が驚き共鳴した事実にも示されています。

このように考えれば萩が培つてきた社会文化の中で、人間社会の絆の本質である誠意を永遠に追求する「至誠」を校訓としてかかげる萩高等学校に集う人々の本来の使命も再び

明確になると思います。

萩の地に生まれ育つたことを誇りに思う心は、この地に生まれたことで自らの中に培われている力を思う心でもあるでしょう。その社会に尽くすために学び続ける力を、われわれ一人ひとりのそれぞれの生き方と立場で人生を通じて社会に役立てる。これが萩の地の高等教育機関と卒業者のこれからも変わることのない使命でしょう。

ところで資本主義型経営と持続的成長経営との違いは別の視点からは、「見えるものの価値のみを信じる意識」と「見えないものの価値を畏敬する意識」との違いともいえます。これは近代西欧合理主義発想と古代東洋文明発想との違いにも似ています。

これまで松陰先生は明治維新の先駆者や実行者達を育成した精神的支柱として称賛されてきました。しかし、松陰先生は、東洋文明の重要な構成要素である儒教の創始者孔子の教えを後世に伝承した孟子の伝承者でもありました。東洋古代文明の珠玉の一つを二千年の時空を超えて次の社会へ伝承された松陰先生の役割に

ついてもわれわれは今再び思い起す必要があるのでないでしょうか。そうすれば松陰先生の伝承者としての心が萩の地に育ち学んだすべての人々の心にも受け継がれていく。われわれすべてが松陰先生の伝承されたことをさらに伝承する心をもっていることに思いいたるのではなでしようか。

松下村塾で実践された社会に尽くすために学ぶ私塾の教育システムが、明治期からは西洋列強に追い付き追い越すことを最優先した近代科学教育システムに入れ替わられて一五〇年が経過しようとしています。一方でその間、松下村塾の理念は松陰先生が神格化されることにより広く多くの人々に認知されることになりました。

しかし現実にはその社会に尽くす理念を実践する私塾型の教育システムは現代社会からは消滅してしまった。萩高はどうでしょうか。有名大学への進学者数で高校をランキングする受験教育体制の中でその本来の使命を忘失し自己の存在意義や自信すらも見失いつつあるのではないかとの懸念は不要でしょうか。

いまグローバル社会全体に、社会に貢献するための学ぶ力がかつてないほどに求められています。とすればいまこそが至誠を追求する萩の地の高等教育機関としての存在意義とその無限の使命に再び思いを致すときではないでしょうか。松下村塾を萩高に再興するといえば何か畏れ多いことのようにも思います。しかし、それこそが松陰先生が後世に託されたことではないでしょうか。そして、それは必ずしも非現実的なことでも困難なことでもないようにも思いました。

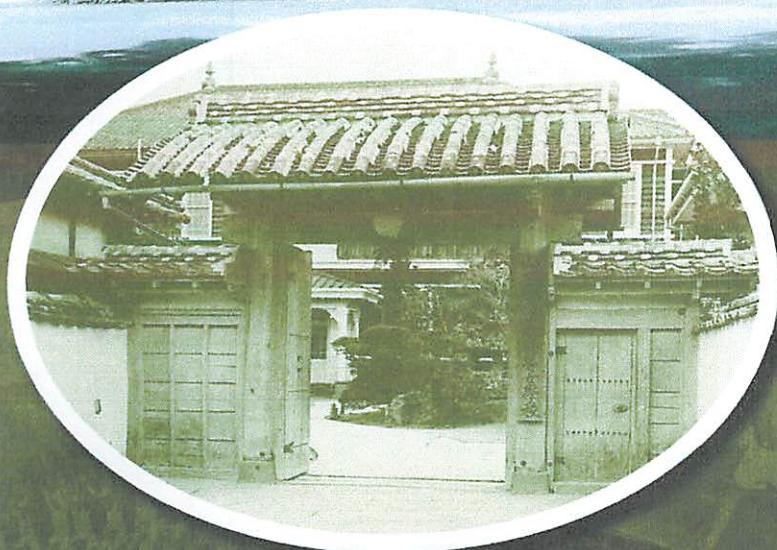
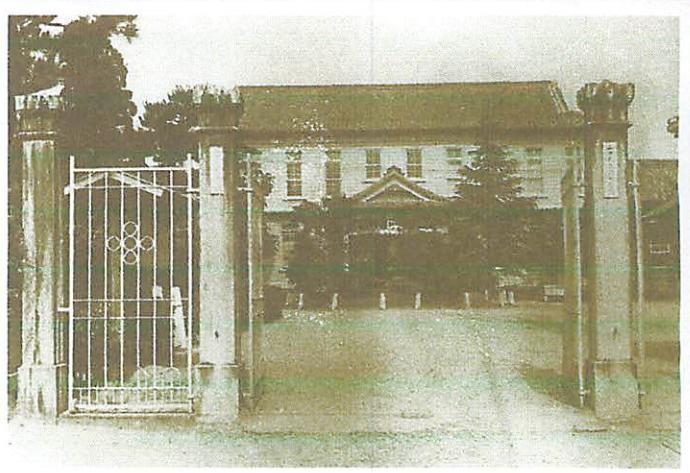
先ずは現代社会の受験教育体制を超越し変革するためにその受験競争（名古屋商科大学大学院教授）

からは絶対に逃げない。しかし、その受験競争を経て何らかの立場を確立することによしなどともしない。そこから改めて草莽として崛起する。



# 萩高同窓会報

記念号 第60号  
平成25年



萩高等学校同窓会